

資料4：旧門脇小学校の保存方法・活用方法の比較（1/3）

（1）現状の校舎を全て保存

	活用方法 1-1 見学者を建物内に入室させる	活用方法 1-2 建物外部から見学する
活用概要	<ul style="list-style-type: none"> 現状の形状を現状のまま保存し活用する。 展示方法としては、廊下部分を見学コースとし、建物内部に見学者を入室させることで、被災した空間をより間近で観察・体感することができ、鮮明に被災状況を伝承させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 現状の形状を現状のまま保存し活用する。 地震、津波に加え火災による被災状況がよく分かる南面に、見学用の通路や階段を新たに設置する。 見学者は建物の外部から見学する。 建物内部に入室しないため、内部についても既存の状態のまま残すことができる。
概算事業費	耐震診断費： 約 8,800 千円	耐震診断費： 約 8,800 千円
	初期整備費： 約 857,740 千円	初期整備費： 約 1,025,037 千円
	維持管理経費： 約 17,850 千円	維持管理経費： 約 17,850 千円
	長期修繕費： 約 9,550 千円 (建物本体の修繕は 10 年毎に実施)	長期修繕費： 約 11,800 千円 (建物本体の修繕は 10 年毎に実施)
	備考： ・上記の事業費は保護屋根を設置した場合の費用 ・活用方法 1-1 の内部見学については内部にあるものを移転させる費用が発生する。 ・耐震補強費・保存処理費は耐震診断調査を実施しなければ積算できないため、上記には含まれていない。	
メリット	<p>【震災遺構としての伝承】</p> <ul style="list-style-type: none"> 現状全てを残すことから、火災元となった東側を保存することができ、震災遺構として印象強く保存することができる。 建物内に入るにより、被災した空間で被災の状況を間近に観察することができる。 <p>【費用面・管理面】</p>	<p>【震災遺構としての伝承】</p> <ul style="list-style-type: none"> 現状全てを残すことから、火災元となった東側を保存することができ、震災遺構として印象強く保存することができる。 南側に見学通路を設置し、外部から見学するため、内部を被災した状態のまま保存することができる。 <p>【費用面・管理面】</p>
デメリット	<p>【展示方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> 見学コースとなる廊下部分については、残骸を撤去させる必要がある。 直接手に触れられたくないものや施設運営上の安全等に配慮が必要。(内部に安全柵の設置など) <p>【地域への影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> 覆い屋根を設置するが、建物の大きさがそのまま維持されるため、地域への影響力は大きい。 <p>【費用面・管理面】</p>	<p>【展示方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部からの見学となるため、被災した空間を体感することができない。 外部から死角となっているエリアは見ることはできない。 <p>【地域への影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> 覆い屋根を設置するが、建物の大きさがそのまま維持されるため、地域への影響力は大きい。 <p>【費用面・管理面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 保存する規模も大きく、外部通路も新設するため、現時点で積算できる概算事業費では 6 パターンの中で最も費用が高い。
コメント	<ul style="list-style-type: none"> 覆い屋根が大規模になり、圧迫感があることが予想され、地域住民への影響は大きいですが、全て保存することで、火災元及び校舎の燃え方など火災被害の状況をそのまま伝えることができる。 見学ルートを内部に設けることで、現状のまま内部を残すことはできないが、空間を体感することができるため、震災遺構として見学者により強い印象を与えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 覆い屋根が大規模になり、圧迫感があることが予想され、地域住民への影響は大きいですが、全て保存することで、火災元及び校舎の燃え方など火災被害の状況をそのまま伝えることができる。 現時点で想定される概算事業費は 6 パターンの中で最も高いが、内部の状態も被災時のまま残され、最も災害時の状態で保存することができる。

資料4：旧門脇小学校の保存方法・活用方法の比較（2/3）

（2）校舎東側3スパンを保存

	活用方法 2-1 見学者を建物内に入室させる	活用方法 2-2 建物外部から見学する
活用概要	<ul style="list-style-type: none"> ・門脇小の被害の特徴である火災元の東側3スパンのみとし、保存箇所を最小限に抑えて活用する。 ・展示方法としては、廊下部分を見学コースとし、建物内部に見学者を入室させることで、被災した空間をより間近で観察・体感することができ、鮮明に被災状況を伝承させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・門脇小の被害の特徴である火災元の東側3スパンのみとし、保存箇所を最小限に抑えて活用する。 ・見学用の通路や階段を新たに設置し、見学者は建物の外部から見学する。 ・建物内部に入室しないため、内部についても既存の状態のまま残すことができる。 ・規模が小さくなるため、新たに設置する通路の規模を抑えることができる。
概算事業費	耐震診断費：約 8,800 千円	耐震診断費：約 8,800 千円
	初期整備費：約 218,127 千円	初期整備費：約 361,543 千円
	維持管理経費：約 12,350 千円	維持管理経費：約 12,350 千円
	長期修繕費：約 1,950 千円 (建物本体の修繕は10年毎に実施)	長期修繕費：約 4,700 千円 (建物本体の修繕は10年毎に実施)
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・上記の事業費は保護屋根を設置した場合の費用 ・活用方法 2-1 の内部見学については内部にあるものを移転させる費用が発生する。 ・耐震補強費・保存処理費は耐震診断調査を実施しなければ積算できないため、上記には含まれていない。 	
メリット	<p>【震災遺構としての伝承】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建物内に入ることにより、被災した空間で被災の状況を間近に観察することができる。 <p>【費用面・管理面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・規模が最も小さくなり、見学通路も新設しないため、最もコストが抑えられる。 ・規模が小さくなるため、全体を残した場合と比較して、施設管理の面において容易になる。 	<p>【震災遺構としての伝承】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見学通路を設置し、外部から見学するため、保存する箇所については内部を被災した状態のまま保存することができる。 <p>【費用面・管理面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・規模が小さくなるため、全体を残した場合と比較して、施設管理の面において容易になる。
デメリット	<p>【展示方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西側全てが解体されるため、どこまで火災が燃え広がったのか分からなくなる。 ・見学コースとなる廊下部分については、残骸を撤去させる必要がある。 ・直接手に触れられたくないものや施設運営上の安全等に配慮が必要。(内部に安全柵の設置など) ・一部解体することによって、遺構としては、被災した“建物の一部”といった印象が年月の経過と共に色濃くなっていくことも考えられる。 <p>【地域への影響】</p> <p>【費用面・管理面】</p>	<p>【展示方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西側全てが解体されるため、どこまで火災が燃え広がったのか分からなくなる。 ・外部からの見学となるため、被災した空間を体感することができない。 ・外部から死角となっているエリアは見ることはできない。 ・一部解体することによって、遺構としては、被災した“建物の一部”といった印象が年月の経過と共に色濃くなっていくことも考えられる。 <p>【地域への影響】</p> <p>【費用面・管理面】</p>
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・火災被害のみが残ってしまい、地震、津波、火災の3つの被害を受けたことや火災の燃え広がり方を伝えられない。 ・小規模になるため、地域住民への影響は少なく、グラウンドを広く活用することができる。 ・見学ルートを内部に設けることで、現状のまま内部を残すことはできないが、空間を体感することができるため、震災遺構として見学者により強い印象を与えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・火災被害のみが残ってしまい、地震、津波、火災の3つの被害を受けたことや火災の燃え広がり方を伝えられない。 ・小規模になるため、地域住民への影響は少なく、グラウンドを広く活用することができる。 ・保存する部分については、内部の状態は被災時に近い状態で保存することができる。

資料4：旧門脇小学校の保存方法・活用方法の比較（3/3）

（3）校舎西側3スパンを解体

	活用方法 3-1 見学者を建物内に入室させる	活用方法 3-2 建物外部から見学する
活用概要	<ul style="list-style-type: none"> 保存する箇所として、地震、津波、火災の各被災状況が分かること、門脇小学校は火災被害が特徴的であり、特に東側は火災被害が甚大であったことを考慮して解体を校舎西側3スパンのみとし、必要な箇所を保存する。 展示方法としては、廊下部分を見学コースとし、建物内部に見学者を入室させることで、被災した空間をより間近で観察・体感することができ、鮮明に被災状況を伝承させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 活用方法 3-1 と同様の考え方で、西側3スパンを解体し、最低限必要な箇所を保存する。 南面に、見学用の通路や階段を新たに設置し、見学者は建物の外部から見学する。 建物内部に入室しないため、内部についても既存の状態のまま残すことができる。
概算事業費	耐震診断費： 約 8,800 千円	耐震診断費： 約 8,800 千円
	初期整備費： 約 708,546 千円	初期整備費： 約 810,238 千円
	維持管理経費： 約 17,850 千円	維持管理経費： 約 17,850 千円
	長期修繕費： 約 7,700 千円 (建物本体の修繕は10年毎に実施)	長期修繕費： 約 10,100 千円 (建物本体の修繕は10年毎に実施)
備考	<ul style="list-style-type: none"> 上記の事業費は保護屋根を設置した場合の費用 活用方法 3-1 の内部見学については内部にあるものを移転させる費用が発生する。 耐震補強費・保存処理費は耐震診断調査を実施しなければ積算できないため、上記には含まれていない。 	
メリット	<p>【震災遺構としての伝承】</p> <ul style="list-style-type: none"> 西側を一部解体するが、火災元や燃え広がり方は残すことができる。 建物内に入ることにより、被災した空間で被災の状況を間近に観察することができる。 <p>【費用面・管理面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 一部解体するため、全体を残した場合と比較して、施設管理の面において容易になる。 	<p>【震災遺構としての伝承】</p> <ul style="list-style-type: none"> 西側を一部解体するが、火災元や燃え広がり方は残すことができる。 南側に見学通路を設置し、外部から見学するため、内部を被災した状態のまま保存することができる。 <p>【費用面・管理面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 一部解体するため、全体を残した場合と比較して、施設管理の面において容易になる。
デメリット	<p>【展示方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> 見学コースとなる廊下部分については、残骸を撤去させる必要がある。 直接手に触れられたくないものや施設運営上の安全等に配慮が必要。(内部に安全柵の設置など) 一部解体することによって、遺構としては、被災した“建物の一部”といった印象が年月の経過と共に色濃くなっていくことも考えられる。 <p>【地域への影響】</p> <p>【費用面・管理面】</p>	<p>【展示方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部からの見学となるため、被災した空間を体感することができない。 外部から死角となっているエリアは見ることはできない。 一部解体することによって、遺構としては、被災した“建物の一部”といった印象が年月の経過と共に色濃くなっていくことも考えられる。 <p>【地域への影響】</p> <p>【費用面・管理面】</p>
コメント	<ul style="list-style-type: none"> 全体保存と比べ、保存する規模が小さくなるため、圧迫感を抑えられるが、保存箇所については被災の状況が分かるよう考慮する必要がある。 見学ルートを内部に設けることで、現状のまま内部を残すことはできないが、空間を体感することができるため、震災遺構として見学者により強い印象を与えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体保存と比べ、保存する規模が小さくなるため、圧迫感を抑えられるが、保存箇所については被災の状況が分かるよう考慮する必要がある。 一部解体するが、内部の状態は被災時にちかい状態で保存することができる。